

令和 6 年度

第 1 回
総合教育会議会議録

行橋市教育委員会

令和 6 年 11 月 19 日(火)

総合教育会議会議録

- 1 招集日時
令和 6 年 11 月 19 日(火) 13 時 ～
- 2 招集場所
市役所 第2委員会室 (5階)
- 3 出席者
市 長 工藤 政宏
教育長 山田 英俊
教育長職務代理者 吉兼 法子
教育委員 桃坂 克己
教育委員 鬼頭 良典
教育委員 尾崎 環
- 4 欠席者 無
- 5 出席職員等 吉本教育総務課長
古城指導室長
加來教育総務課課長補佐兼教育政策係長
檜山教育総務課ICT・英語教育推進係長
- 6 議題及び議事の概要
別紙
- 7 閉会 14 時 46 分

令和6年11月19日

開議 13時00分

1. 開会

○教育総務課課長補佐兼教育政策係長 加來義宏君

定刻となりましたので、ただいまより総合教育会議を開催いたします。

本日は、お忙しいなか、御出席をいただきまして、ありがとうございます。

それでは、お手元に配付させていただいております、令和6年度第1回総合教育会議協議事項に沿って進めさせていただきます。

まず、総合教育会議の設置者であります、工藤市長より御挨拶をいただきます。

2. 市長挨拶

○市長 工藤政宏君

皆さん、こんにちは。着座にて失礼します。

きょうなんですけれども、行橋市の英語教育の充実ということで、皆さん方とディスカッションさせていただきたいと思っています。

行橋市の英語はもちろんなんですけど、そもそも国の方針はどうかとか、きょうはですね、前回、皆さん全員で行くことはできなかったんですが、他市の現場もちょっと見たりもしました。また、それぞれに海外の御経験もある方もいらっしゃるだとか、あるいはこれまでの御自身の人生の中で、あるいは教育現場に立つ中で、いろいろな英語教育というものに対して様々な御見解があるかと思っています。

我々行橋市、行橋市教育委員会としましては、子どもたちの、これはある意味いろいろなところで言われる言葉でありますけど、子どもたちの生きる力を育む。では、生きる力とはなんぞやと。特にこの英語というものに関して、本当に子どもたちに育みたい英語の力というのは一体何なのかというところを、会議という名称ではありますけれども、腹を割って皆さんの本音も出していただいて真剣に考える、まずキックオフと言いますか、大きなきっかけにできたらと思っていますので、ぜひ忌憚なき御意見をいただければと思います。きょうは、よろしくお願ひします。

3. 協議事項

○教育総務課課長補佐兼教育政策係長 加來義宏君

ありがとうございました。

それでは、協議事項に入りたいと思います。

工藤市長、議事の進行をお願いいたします。

○市長 工藤政宏君

それでは、協議事項に入らせていただきます。

本日の協議事項ですが、先ほど申し上げましたとおり、行橋市の英語教育の充実についてでございます。

ちょっと総合教育会議について説明させていただきますと、総合教育会議とは、市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、地域の教育の課題やあるべき姿を共有して、より一層民意を反映した教育行政の推進を図ることを目的としております。

というところで、まずですね、この協議をする前に、事務局から行橋市の英語教育の現状や課題について、まず説明をしていただきたいと思います。その説明の最中に、文言だったり、この数字だけではちょっと意味が分からないことがありましたら、遠慮なく教えてください。また私のほうとしましても、ある程度説明が進んだら、ではここまですべて御質問はありませんかと、私のほうでもつくりましますけれども、皆さんのほうでも、ちょっとでも疑問に思うことがあったら止めていただいて全然構いませんので、遠慮なく御質問いただければと思っております。

それでは、事務局から説明をお願いします。

○教育総務課長 吉本康一君

それでは事務局のほうから、まず御説明いたします。お手元に資料をお配りしておりますので、まず資料1ページをご覧ください。令和6年度の語学指導（外国語）についてでございます。

まず、外国語の指導においては、担任の先生の指導だけでなく、ALT 外国語指導助手も重要な役割を担っておりまして、小学校外国語科及び外国語活動の補助、中学校外国語科の授業補助、また教材の研究及び教材の作成、小学校学級担任または中学校の教科担任と一緒にティーム・ティーチングによる授業を実施しております。

任用の状況といたしましては、教育委員会が直接雇用しておりますものが7名、国の外国青年招致事業、JETプログラムと言いますけれども、これを活用しての雇用が1名、計8名の体制となっております。1名のALTが1校もしくは複数校を担当している状況です。

現在の小学校学習指導要領では、小学校5、6年生で外国語が教科化されたこともありまして、担任教員の指導力向上が求められているところであります。ALTには、担任との協力体制の下で、より効果的な授業を一緒につくっていくことをより意識するように指示しているところでございます。

次のページをお願いします。

ALTの授業外の活動としましては、様々な学校行事や学校活動にも参加し、子どもたちとコミュニケーションを積極的にとったり、夏休みにおきましては、英語の実践の場として、小学生向けには、今年度においては公民館での英語教室、中学生向けには、

北九州市にあります北九州グローバルゲートウェイ、通称KGGと言いますけれども、その施設を利用しての英語体験学習を開催しています。添付の写真は、それぞれの活動の様子です。小学生の英語教室については、今年度は64名の小学生が参加、中学生の英語体験学習については、15名の方に参加をいただいたところでございます。

また、3ページの写真については、小学校高学年の外国語の授業の様子となっております。担任教員とALTが役割分担を行いまして、協力して授業を展開しております。

また、少し見えにくいですが、この授業では、英語のデジタル教科書を活用し、音声や動画の再生も行いながら、その効果を取り入れているところです。

4ページをお願いいたします。

ここでは、全国学力学習状況調査における英語に関する質問紙の回答結果について、まとめております。

まず、小学校6年生向けですが、質問1、英語の勉強は好きですか、という質問に対し、当てはまる・どちらかといえば当てはまる、を合わせた割合が58.4パーセント、これは、福岡県、全国の割合に比べて10ポイント以上低い状況となっております。

次に、質問2、英語の勉強は大切だと思いますか、との問いに対しては、これも県、全国よりも低い状況ではありますが、割合としては87.3パーセントと高い割合でありまして、英語の重要性を認識している子どもが多いことが分かります。

次に、質問3、英語の授業の内容はよく分かりますか、に対しては、こちらも県、全国に比べて大きく低くなっておりまして、授業の理解度に課題があることが分かります。

続いて、5ページをお願いいたします。

中学校3年生向けの質問ですけれども、5ページ、6ページに質問1から質問5までありますが、この調査の質問をしたときは、中学校3年生の4月でありましたので、1、2年生のときに受けた授業で、例えば自分の気持ちを英語で伝え合う活動や英語で書く活動など、様々な活動が行われていたかを質問しています。いずれの質問においても、当てはまる・どちらかといえば当てはまる、の合計割合は、県、全国よりも低いものの、大きな差があるとは言えませんが、当てはまる、だけに着目すると、県、全国との差は、比較的大きい状況です。

では、これをどう捉えるのかということですが、生徒一人一人の捉え方にもよるところはありますが、質問内容にあるような活動が、授業展開の中で、より明確化されているかどうかを表しているのではないかと、すなわち、授業の構成上、そういった活動を生徒にしっかり意識付けて実施できているかどうか、ということにつながっているのではないかと考えております。ですので、この部分が、県や全国と比べて、若干弱いと言えるのではないかと考えております。

続いて、7ページをお願いいたします。

令和5年度の小学校ESGテストの結果と中学校IBAテストの結果について、御説明いたします。

まず、小学校ESGテストの結果です。8ページをお願いいたします。

小学校ESGテストは、令和5年度から、福岡県が希望する自治体に対して実施しているものです。対象については小学校6年生で、内容は、リーディングとリスニングの2つの技能を図るテストとなっています。

9ページをお願いいたします。

テスト結果としましては、英検での級レベルとの比較が出されておりますが、左側の総合点での平均スコアをみると、日本英語検定協会によれば、英検で最初に目標として受験するのが英検5級といわれておりまして、その5級レベルに到達しているのが分かると思います。また、中央のリスニングの結果では、特に、5級レベルを大きく上回っていることが分かります。これは、本市としては小学校の早い段階から、普段の授業の中を含めて、冒頭申し上げましたように、ALTと関わる機会を増やしている成果が、このように出ているものと考えています。

続いて11ページをお願いいたします。中学校IBAテストの結果についてです。

中学校IBAテストは、以前から、福岡県が、これは希望制ではなく、県内の公立の全中学校の3年生を対象に実施しているもので、さらに令和5年度からは、対象を拡大して、1、2、3年生、全学年を対象に実施しております。こちらも、内容としては、小学校ESGテストと同様に、リーディングとリスニングの2つの技能を図ることができ、1年生は英検5級レベル、2年生は英検4級・5級レベル、3年生は英検3級から5級レベルのテスト内容となっております。

12ページをお願いいたします。

上段の平均スコアにおいては、各学年とも、約20点から30点、県の平均スコアを下回っております。下段は、分野別の本市の平均正答率を示したものです。こちらにつきましては、県平均などが不明なため、それらとの比較はできませんが、分野同士を比べると、こちらも、先ほどの小学校ESGテストと同様に、ALT配置の効果と思われるのですが、リスニングの正答率が各学年とも比較的高い割合となっております。

一方、中央の読解については、比較的低くなっておりまして、英文を読み解く力が十分ではないと言えるのではないかと思います。これについては、よく言われる国語の文章問題やその他の教科における試験問題文、そのものを読み解く力が弱いと言われていることにも通じるものがあるのかもしれませんが。

また、左側の語彙・熟語・文法については、昔ながらの英語の学習において言えることだと思いますが、中学校に入学すると、まずは単語を覚える、そして文法を覚えることのウェイトが大きくなりまして、生徒たちも高校受験を目指して、それらを一生懸命

反復して覚えようとしているところです。その成果もあってか、この表は同一集団を表したものではありませんが、1年生が48.1パーセント、2年生が67.8パーセント、3年生が72.1パーセントと、学年を重ねるごとに、正答率が上昇していることが分かります。

続いて13、14ページをご覧ください。

この中学校I B Aテストでは、英検の級レベルと比較して、英語力がそのレベルに達している生徒の割合が出されますけれども、ここでは学年ごとの結果を表示しています。

1年生では、英検5級合格レベルが58.3パーセント、2年生では、英検4級合格レベル以上、すなわち9.4パーセントと17.0パーセントを足した26.4パーセント、3年生では、英検3級合格レベル以上が35.5パーセントという結果でした。

15ページをお願いいたします。

御存知のとおり、本市の教育行政の中心的計画は、教育振興基本計画でありまして、現在、第2期計画の計画期間中でございます。その中に掲げた施策、持続可能な社会のための学びの展開、これの重点取組の一つに、グローバル教育の充実というのを位置付けておりますけれども、ここでは、K G I 目標達成指標ですが、この数値的な指標として、義務教育9年間の最終学年であります中学校3年生の段階で、このI B Aテストにおける、英検3級合格レベル以上の割合を設定しております。また、第2期計画スタート以前も、このI B Aテストが行われておりまして、その結果は随時チェックしてきております。この表は、その割合の推移を示しておりますが、これを見ますと、令和2年度の53.2パーセントが最も高く、その後は下降傾向にあると言えるのではないかと感じているところです。

16ページをお願いいたします。

ここまで説明してきたように、本市の英語の学力としては、まだまだ十分伸びしろがあるという状況でございます。そんな中で、本市としても、冒頭市長が申しましたが、今後、さらに子どもたちの英語のスキルを伸ばしていくための取組の参考とするため、英語教育の先進的な取組を実施しております飯塚市の状況を、先日視察してまいりました。教育委員の皆さんも参加いただきましたが、残念ながら参加できなかった委員もいらっしゃいますので、情報の共有の意味も含めて、16ページ以降に、視察時の聞き取りの内容、また飯塚市からいただいた資料からの抜粋をまとめております。

まず、オンライン英会話レッスン導入についてですが、飯塚市が行っているオンライン英会話は、フィリピンのセブ島にいる外国人講師と英語の授業中に、インターネットを経由して、1対1もしくは1対2のオンライン英会話レッスンを行っているものです。

この16ページの1つ目の項目、飯塚市の英語力向上の計画というところで、飯塚市も目標を掲げております。本市と同様に、先ほど説明した小学校E S Gテストと中学校

I B Aテストの結果を活用して、中学校では、英検 3 級合格レベルが 5 0 パーセント以上、小学校におきましても、英検 5 級合格レベルが同じく 5 0 パーセント以上を目指すというものでございます。

2 つ目の項目、オンライン英会話の導入理由などについてですが、令和 2 年度から小学校において、正式に外国語が教科化されるなど、英語教育の本格展開が予定されていた中で、グローバル社会で、生きて働く、コミュニケーション能力の育成を目指し、児童の、聞く・話す、を中心とした英語によるコミュニケーション能力の基礎を養っていききたい、そのような思いから導入されたそうでございます。

3 つ目の項目、導入時の学校への研修などについてです。当然のことですが、このような新たな取組を始めるに当たりましては、教育委員会だけではなく、どのような目的をもって行うのか、また、どのような効果を期待するのか等々、教育現場と同じ共通認識を持ち、同じ方向を向くために、各小学校の外国語担当教員や情報教育担当教員、そして、最も重要な管理職を対象として研修を重ねたとのことでございます。

4 つ目の項目、A L T が行う語学指導とオンライン英会話の実施方法として、どのようにすみ分けしているのか、についてです。ここは、A L T を多く雇用している本市としても非常に興味がある部分でありまして、飯塚市としては、そもそも目的や役割が違ふとのことでした。では、どういうことかということ、A L T は、小学校 3、4 年生を対象に派遣をしていて、語学力を高めるよりも、外国の文化に興味関心を持たせるため、一方、オンライン英会話については、小学校 5、6 年生を対象に実施しており、ここでは話す・聞くというコミュニケーションの素地をつくるためという内容でした。

5 つ目の項目、事業費の財源ですが、当然ながら、こういった取組を行うにあたっては、ある程度まとまった事業費が必要になりますが、飯塚市においては、現時点では、一般財源ではなく、企業版ふるさと納税や個人版のふるさと納税という特定財源を充当しているとのことでした。ただし、お話を伺うなかで、ふるさと納税も恒久的に担保されている財源ではないため、納税額が仮に減少した場合の財源確保をどうしていくかということ、飯塚市としても課題認識されているというような内容でした。

1 7 ページをお願いいたします。

6 つ目の項目、事業費規模やオンライン英会話の実施回数についてです。飯塚市の令和 6 年度の予算ベースで、このオンライン英会話の事業費は、約 6 千万円とのことです。

また、小学校の英語の授業が、4 5 分授業の中で、このオンライン英会話に当たりまらず時間が、約 2 5 分間になりますが、講師 1 人あたりの 1 コマの単価としては、1、7 0 0 円とのことです。また、実施回数としては、令和 5 年度の状況は、小学校 5、6 年生のみを対象として、それぞれ年間 1 8 回、これは、全てマンツーマン、講師 1 人と児童が 1 人でのマンツーマンでの実施です。

また、令和6年度については、内容を少し変更されたようで、まず、小学校5年生では、昨年度まで中々マンツーマンでやっても、講師とコミュニケーションをとることができない児童もいたということで、今年度については、講師1人に対して児童2人のペアレッスンに変更したそうです。また、議会等々からの指摘もあったそうですが、中学校にも展開できないのかというような話があったそうで、それらを受けて、今年度からは中学校に対象を拡大し、その代わりに、事業費を大きく増額させないために、小学校5、6年生の回数を若干減らしたそうです。その下の四角で困っている部分には、本市での事業費を試算しております。仮に、本市の小学校5、6年生を対象として、全てペアレッスン、講師1人に対して児童2人というかたちで、回数として年間10回ということで試算したんですが、年間で約1,160万円という事業費が必要になってまいります。

続いて、オンライン英会話レッスンの効果についてです。

1つ目の項目、導入前と後で、児童の意欲や教員の意識など変わったと感じる点についてですが、飯塚市では、導入前と後でアンケートを実施しているようで、オンライン英会話が楽しみだ、という割合が、導入前は高かったそうですが、導入後に実際にアンケートをとったところ、この回答の割合が低かったということです。担当の方のお話では、実際にオンライン英会話を経験してみて、やはり画面越しに講師の方とコミュニケーションをとることの難しさを肌で感じた児童が多かったのではないかと、ということでした。

ただ、その一方で、下に書いているように、外国人と話してみたい、外国に行ってみたい、という割合のほうは増えたということで、外国人とは話してみたいと思う児童が増えているけれども、オンライン越しの外国人講師との会話は非常に難しさを感じているという、若干のズレみたいなものを、私個人としては感じたところです。

この他には、スピーチコンテストとかもやっているそうなんですが、このレベルが上がったと感じた、また、アメリカ合衆国カリフォルニア州サニーベール市を訪問する、このグローバル人材育成研修事業というのを飯塚市さんがやっているんですけども、本市でいうところのグレイス・チャーチ・スクールとの交流事業と同様な事業だと思いますが、この事業への応募が20名の募集に対して50名以上の応募があった、応募者数が増えたという変化があったということです。

続いて2つ目の項目、英語授業において、指導方法や担任の負担軽減など改善された点についてです。

飯塚市の特徴として、英語専科教員を小学校19校あるのですが、その19校に対して6名確保しております、小学校6年生の英語授業、これ年間70時間ありますが、この70時間の中で、オンライン英会話がある授業、これ今年度は年8回、これを含め

て全ての授業を英語専科教員が主体で行っておるというところです。また、小学校5年生の英語授業、これも年間70時間ございますが、この70時間の内、オンライン英会話がある授業、5年生は年10回ですけれども、この10回のみ、これは6年生と違うところですが、5年生は、このオンライン英会話がある授業のみ英語専科教員が主体で行い、その他の授業、年60時間になりますが、この分については担任が主体で行っているというところです。どちらの学年においても、英語専科教員が主体となって行う英語授業のコマについては、担任の教員の負担軽減につながっているというところです。

18ページをお願いします。

3つ目の項目、英語力向上の効果や英語力を図る指標についてです。飯塚市も、目標指標を掲げていると申し上げましたが、実際にその結果としては、飯塚市の令和6年度の英検ESGテスト結果、5級相当レベルが68パーセント以上あるというところです。

ちなみに、本市の状況はどうかと言いますと、本市の令和5年度のESGテスト結果、5級相当レベルは62パーセントでありました。この結果を見て、オンライン英会話を実施している飯塚市とオンライン英会話を未実施の本市の現状としても、それほど差がないと捉えるのか、まだまだ飯塚市とは差があるから、その上を目指すためにも、新たな取組を実施するのか、もしくは、現状のALTの人員体制のままALTの授業での関わり方を見直して効果を上げるのか、もしくは現状のままで今後の学力向上を期待していくのか、ここについては、様々な意見が分かれるところかなと思っています。

また、この他に飯塚市での効果としては、令和6年度の実施はなかったそうなのですが、英検ジュニアというところで、レベルが全国的にみても高くなった、また、中学校入学時に実施しているフクトのテスト結果が良くなっている、このような効果を飯塚市さんとしては実感をしているというような内容でございました。

長くなりましたが、内容は以上です。

○市長 工藤政宏君

ありがとうございます。説明が終わりました。

非常に幅広く説明がありまして、行橋そして飯塚の状況をかいつまんで説明いただきましたけれども、まずは皆さん方から、今の説明を聞かれて、また説明に関係ないものでも結構ですが、英語教育について何か御意見等々がありましたら、出していただければと思います。

(特に声なし)

中々とっかかりが難しいと思いますので、私のほうから、もうちょっと言わせていただきたいと思いますが、最初の挨拶でも言いました、子どもの生きる力を育む、というところで、じゃあ英語に関しては、やっぱり、これからの行橋の子どもたちには、日本だけではなくて世界でも活躍してほしいというか、例えば世界に羽ばたいていく

いといったときに、その素地が備わっている子どもを育てる必要があるのかなと思うんですね。つまり、そういった基礎を育ててあげるといのが我々の仕事だと思うんですけども、実際じゃあ、今なぜこれだけ英語教育といったものが問題というか、日本の英語教育ってどうなのと、いろいろなところで言われてきまして、きょうもどこかの新聞に英語教育に関わることで、西日本新聞や日経にも載っていました。日本の英語力、過去最低の92位という、116カ国の国、地域で調査して、スイスの企業が調査しているんですけども、これは独自の指標なので、語学学校を世界展開する企業、EFエデュケーション・ファーストというスイスの企業さんが、これを調べているんですよ。2024年の英語能力指数というのを調べたところ、日本は過去最低の116カ国中92位だったそうです。

その日本の中でも日本各地の地域別指数は、関東地方が482と最高だった、続いて関西、四国、北海道などが続き、東北の440点が一番低かったということですが、九州の名前が出ていないんですが、九州は、だからもう下のほうということですよ。というところで、これも東京とか関西を中心に同心円状に広がっていったというイメージなんですか。といったようなところが記事にあがっていました。

ちょっと皆さんに質問なんですけど、日本の英語教育を受けてきて、良い部分、悪い部分があったと思うんですけども、良かったなと思われている方、もしくは、いやちょっと正直満足できないなという方。すごくざっくりとした、この二択というのは非常に厳しいかもしれませんが、あえて聞きたいと思いますが、日本の英語教育を受けてきて良かったと思っている方、ちょっと挙手していただけますか。

(挙手なし)

じゃあ悪かったとは言わないけれども、ちょっと疑問があるという方は、手を挙げていただいてもいいですか。

(教育委員、全員挙手あり)

私もそうなんですよ。

これですね、今の英語教育を否定しているわけではなくて、ちょっと率直に考えていかなければいけないと思って今のような質問をしたんですが、つい先だって、みらい共創フォーラムというのをコスメイトで実施しまして、きのう教育長とも話したんですが、そこに例えば東急の野本会長さんも見えていて、高校生たちが、若い時に何を学ばいいですか、みたいな質問をしたんですかね。そのときに野本会長さんが、英語が話せないということをしごく後悔している、とおっしゃっていました。

僕自身も海外とか、僕はあくまでも旅なんですけれども、やっぱり今いくら翻訳機があると言っても、やはりコミュニケーションって、瞬発力というのが滅茶苦茶重要だと思っていて、一つ間が遅れたりテンポが遅れるだけで、とりたかったコミュニケーション

ンって、全然とれなくなったりするんですよね。そういう意味では、僕は英語教育というか英会話力というものが、僕の場合はですね、あれだけ英語に時間を割いてきたのに結局話せない。

でも日本の英語教育は、そもそも英会話力を磨くための学問じゃないんですよね。そこで何かたぶんギャップを僕は感じているんですけど、皆さん、どうなんですか。御自身の体験談でもいいし。

はい、桃坂委員、お願いします。

○委員 桃坂克己君

私も3年半くらいアメリカに行ったんですけど、やっぱりそこは感じました。本当に喋れたらよかったのにとこののを、まず一番最初に感じました。

○市長 工藤政宏君

元々は全然喋れない状態だったんですか。

○委員 桃坂克己君

中学校で英語を習いだして、やっぱり最初に嫌いになりましたね。そこなんじゃないかなと思うんですよ。

なんでそれを感じたかと言うと、私が行った半年後に別の方が来られて、御家族で赴任されて来て、向こうの日本人学校に子どもさんが、小学校低学年だったと思いますが入って、1カ月くらいすると、もう英語をちゃんと話すんですよね。

○市長 工藤政宏君

そうですか、1カ月ですか。

○委員 桃坂克己君

あれ、なんで。俺は6カ月以上こっちに居て、俺よりうまいな、この子ほど。必要に迫られるところもあるだろうし、そこに教育のヒントってあるんじゃないかなと。日本人学校というところにもヒントがあるんじゃないのかなと。楽しく過ごしやすいように、たぶん教えているんだろうと思うんですよね。楽しいからコミュニケーションをどんどんとっていききたいというのを、子どもながらに考えながら知識を蓄えていっているんだろうなと。

だから僕も教育委員をやっている、日本人学校のところまで深く入らなかったんだけど、あれはどうしていたんだろうなと。日本人学校の最初のとっかかりの教育って、どういうふうにやったんだろうなと、後になって少し気になった点ではあったんですね。

だからそれを置き換えると、小学校低学年で英語が好きになる、そういったところがやはり必要になってくるのかなと。たぶん段階が上がってくると目的が変わってくるので、そうすると教え方も変わってくると思うんですよね。だから最初のとっかかりで好きになれば、私みたいに大嫌いになると、そこからなかなか伸びていかないけど、好き

になると、全然伸びてくるんじゃないかなというのは感じました。

やっぱり話す、聞くというのが一番大事になってくる。向こうの現地の方でも書けない人が結構いるんですよ。話はできるけど書けない。どうして入社試験に受かったんだろうなと思っていましたけど、そこは人間として生活するうえで一番必要になってくるところかなと。

○市長 工藤政宏君

ちなみに現地では英語が分からない状態に入って、コミュニケーションは段々、意思疎通自体は・・・

○委員 桃坂克己君

そうですね、僕も分からないのが嫌いなので、どんどん中に入って行って、これなんだ、これなんだと聞きながら、だから文法は確かに全然駄目だったと思いますが、単語を拾いながら、後は絵を描きながら、こういったふうにしたらどうなんだ、とやり始めて、帰るころには通訳を付けなくて会議にどうにか出られるように。ただ、英語を書けと言われたらたぶん書けないかなと思うんですけどね。

○市長 工藤政宏君

ありがとうございます。

ちなみに、吉兼さんは。

○委員 吉兼法子君

はい。私はですね、もう30年くらい前の話になるんですが、2年間アメリカのニューヨークの近くのバージニア州で、文科省の派遣で2年間お仕事をさせていただきました。

その仕事内容というのは、日本語でアメリカ人の子どもに日本語を教えるプログラム、ジャパニーズイマージョンプログラムというのがあるんですけども、そのプログラムを取り入れている学校に派遣されて、ある学年の日本語の授業を担当しました。

私は、それは外国に行く機会が増え始めてからの3年目だったので、そのころから英語の勉強を徹底的にしました。当時はまだまだ日本も景気が良くて、英会話スクールが北九州市にたくさんあったんですよ。それでそこに通いながら英語の力を身に付けたつもりで行きましたけれども、最初はもう全然入ってきませんでした。アメリカ人のスピードがものすごく速いので、ついていけなくて。でも段々聞く力がついてきて、慣れてきて、そうすると、あっ、こう言えばいいんだというのが分かるんですけども、それこそタイミングがとれなくて、あっ、あの時ああ言えばよかったと、後で後悔するんですけども、それも段々慣れてきて少しずつ喋れるようになってきました。

先ほど日本人の英語力が低いというのは、本当によく分かります。私は向こうでいろんな国のアメリカ人以外の友達とも仲良くなりましたけども、大人になっても英語の勉

強をものすごくするんですよ。一緒に勉強しよう、と言って。だからその辺から違うなと思いますね、日本人が英語ができないというのはですね。

だから日本人は必要に迫られていないんだと思うんですよ。日本は日本だけで昔から住みやすい国だから生活ができる、しかも日本語と英語というのは、物すごく較差が、違うんですよ。文法ももちろん違うし文字も違うでしょ。日本語は漢字あり、平仮名あり、ローマ字ありと、いろいろとある。日本人が英語を勉強するというのは、物すごくハードルが高いです。だから日本人の英語力が高まっていかないんだろうなというのは、よく分かるんですけども、これからは、もう絶対に必要だと思います。

逆にアメリカ人は英語以外の言葉も勉強しますが、それは割と簡単に身に付くみたいですね。スペイン語、フランス語、ドイツ語、アルファベットが同じですからね、そういう違いもあるんですけど、日本においてはもっとも子どもたちに英語の勉強をさせないといけないなというのを痛感して帰って来ました。これはもう30年前の話です。でも、いまだになかなか高まっていかないので、いろいろな思いがありますけれど。

○市長 工藤政宏君

ありがとうございます。

教育長、どうぞ。

○教育長 山田英俊君

やっぱり僕らの頃は、本当に大学に入るための受験英語を勉強するということだったんですね。だからいかに点を取るかしか頭の中になかったんですね。だから喋れるというのは、あまり意識になくて、要は問題が解けるみたいな感じですよ。

いま求めている英語というのは、相手とコミュニケーションができるという英語になって、オーラルコミュニケーションなので、そこでやっぱり僕らと全然違いが出てきていると思うんですね。

逆にアメリカ人とか外国人が日本に来て、行橋市内でやはり授業を受けるんですね。子どもたちは、本当に小さい子ほど慣れて日本語を喋れるらしいんです。ただ、授業は全く分からないそうです。なぜかという、数学とか内容が理解できない、そこがまた一苦労があるらしいんですね。

だから、やっぱり喋れるということと、内容が細かいところまで分かるということは別だけれども、行橋でもどこまで目指すかとなってきたときに、やっぱり喋れるだけではなくて、どこまでいくのか、あるいは日常会話ができればいいということまでを目指すのか、目指すところで目的で少しずつまた内容も変わるのかなという気がしています。

○市長 工藤政宏君

確かにそうですね。本当に日本の英語教育って、受験の中での英語教育なので、だか

らたぶん保護者としても喋ればいいのかというと、それだけではたぶん不安だ、となるでしょうし、ただ受験英語といったもの、そこにも対応できる、日本語版英語教育といったものも、まだまだ過渡期にありますので、そこを完全に無視するというのは、なかなか公立学校としては難しいでしょうと。

ただ、やっぱりどこまで、本当に流暢に話せるまではいかなくても、小学生、中学生の段階で、どれくらい英語を使ったコミュニケーションがとれるか。ある程度は何がしかの、先ほど英語を嫌いにならずに英語が楽しいと思ってもらいながら、なおかつ積極的に英語を使ってコミュニケーションをとろうとするようなマインドというのは、少なくとも育ててあげなければいけないとは思うんですけれども。

鬼頭さん、どうですか。

○委員 鬼頭良典君

もうおっしゃるとおりです。結局、英語と英会話は別物だと考えていいんじゃないかなと思います。学問としての英語とコミュニケーションをとるスキルとしての英会話というので考えると。僕が小学生低学年くらいのときは英語を習っていたんですね。いま考えたら英語です。英会話ではなかったなど。

○市長 工藤政宏君

学校とは別にですか。

○委員 鬼頭良典君

別にです、小学生低学年ですよ。当時は英会話レッスンと言われていましたけど、でもいま考えたら英語だなと思うんですよね、英語と英会話と分けて考えると。

ただ単に文法を教え込まれて、それを読めればいい。なので、あんまり面白くなかったんですよね。結構泣きながら行かされていたという感じがあったんですが、結局小2か小3くらいでやめて、ただ、中学校に入って、そこも英語ですから、その手掛かりになったのは少し参考になったというか、読むことはできる。

でも喋れるかということそうではなくて、うちの娘がいま4年生と6年生ですが、今は英会話に行かせています。やっぱり自分の経験上、小さいときから英語に触れる、喋れる、聞くということに触れていってほしいという願いから行かせて、今は、行きたい、と言っています。最初は半分強制的に行かせていたんですが、今は行きたいという感じになってきて、楽しんでくれているのかなと思います。

例えば、結構今インバウンドで外国人の方が街にいらっしゃって道を聞かれる。僕もアレルギーですよ、拒否する。えっ、何と言ったらいいの、という感じなんですけど、娘に言わせたら、道を聞かれているよ、ということで教えてくれるんですよ。僕は分からないですよ。ああ行って、こう行けばいいんだけど、と思うんですけども、そもそもそれを聞かれている質問が分からないので、でも娘からしたら、道を聞かれている

よ、というふうに言われるんですね。

そういうふうに教育長も言われましたけど、高校受験のための英語なのか、これから先、生きていくための英会話なのか、この両輪というか、それがとっても重要だなと思いますし、そういった意味では、生の英語に触れるという意味では、こういったALTとかオンライン英会話とか、そういったところを授業として展開していくのは、すごく意義があることなのかなと思いますながら、先ほどの説明を聞いておりました。グローバルな時代だからですね。

○市長 工藤政宏君

ありがとうございます。英語と英会話、その違いというのは分かりやすいですね。

尾崎さん、いかがですか。

○委員 尾崎環君

私は、もう個人的には英語に接することというのは本当になくて、高校のときもグラマーとリーダーっていうか、読むことじゃないですか。一番記憶に残っているのは、中学校のときの英語の先生が、もう教科書を暗記しなさい、で、ディス イズ ア ペンから始まってという、そのときは暗記させられるから、まだいまだに記憶に残っていますが、2年、3年の先生が何を言ったのか、全然もう記憶にはありません。

大学に入って第2外国語をしなければならなくて、ドイツ語をしたんですね。そのときに先生が、4、5人のグループだったので、物語の本を1冊ドイツ語で覚えさせられたんですね。そうすると、やっぱり結構話せるというか意味が分かってくるし、それからまた、その先生も暇だったのか、1日2日ドイツ語漬けで生活しましょうというかたちで、頭の中でドイツ語しか回らないんですよ、思考するのもドイツ語の言葉で思考しながら、ああ、こんなものかと。今は全然分からないんですよ。でも、そういう環境というのは、とても大事だなと思うし、今から先の子どもたちは、市長さんもおっしゃるように、素地というか、英語が必要と思ったときに勉強ができる、そこの素地を付けてあげることが一番大事と思います。

そして、私は、娘を勤めながら育てたんですが、今のように児童クラブがないから、知り合いが英語の塾をされていたんですね。うちに来させたらいいわ、と言って、小学校2、3、4年と、幼稚園生に交じってアップルとかポテイトとか、遊びながら英語をさせられていたんですね。娘が、私が一番年上で恥ずかしい、と言いながらも、そういう子ども時代がありました。そして、娘が結婚してアメリカに夫婦で行ったときに、娘のほうがよく聞き取れるんですよ。旦那さんは英語がペラペラというか、書くことも論文も英語で書けるし、話せるんですけども、相手が何を言っているのか、聞き取るのは娘が聞き取って、何々と言っているから、こう答えたら、といったかたちで話してきたのよ、二人でワンペアだった、ということを知りました。

その娘がスイスに知り合いがいてホームステイしたんですけど、スイスのそこのお子さんは、5歳なのに、もう4カ国語がペラペラで、お姉ちゃん起きなよと、朝、日本語で起こしに来る。だけど窓を開けて、何とかと言ってスイスの地元の言葉を話すし、今度は普通のスイス人と話すときは、英語で話す人もいるしドイツ語で話す人もいるし、4、5カ国語を瞬時に使い分けられているというか、やっぱり聞く耳が要るんだなということ、本当に感じました。

だからそれは小さいうちじゃないと、なかなかできないことだと思うんですね。ドイツ語をするときには、巻き舌をして言うんですけども、私はそれが中々できなくて、それから発音とか、そこら辺がとても難しくて。それをやっぱり現地の先生とかそれが上手にできる先生と会話して行って、聞き分けきる力というのを本当に幼いころから身に付けることが大事だなと思っています。

だから子どもを預けたときも、英語のビデオをしょっちゅう見せて、BGM代わりにいいからというかたちと、それからやっぱり昔から英語教育はちょっとずつ言われていたから、英語ができる先生は英語のニュースをGBMでずっと家の中で流しているんですね。聞いてはないんだけど、流しておくとなんとなく発音が入ってくるとおっしゃっていたから、聞く力というのはとても大事なんだなということをいま思っています。

○市長 工藤政宏君

ありがとうございます。

ちょっと1時間経とうとしていますが、今回そもそも、私は昨年から1回、教育委員の皆さんと飯塚の英語の現場を見に行きたい、ところが丁度台風が接近して大雨もあって結局行けなかった。それでこの前、行ける方々とようやく行けた、という経緯がありました。

私がもう5年以上前、議員時代のときに飯塚市の英語教育を最初に見に行ったんですね。そのときはマンツーマンでした。タブレットを通してマンツーマン。英語の授業の前15分くらいマンツーマンでやっていたのかな。そのときに説明いただいたし、私も実際に見て思ったのは、やっぱり指導者1人に対して子ども複数だと、どうしてもそこで積極的な子と、やや消極的な子と差が出てしまう。でもマンツーマンだと、ヘッドフォンを付けて皆やっていたので没入して、要は消極的な子もある意味コミュニケーションをとらざるを得ない状況がそこで生まれる。回りも気にならないので、そこで結構積極的にコミュニケーションを子どもたちがやっています、という話でしたし、私も実際に見て、そういう印象がありました。

そのときは、あまりアンケートというのではなくて、ただ、今回行ったときに、私たちが見たのは1対2だったわけですが、アンケートで、それが始まったら、私はてっきり英語に対する関心が高まるものと思っていたんですけども、今回、先ほどの説明があ

ったように、実際に関心が飯塚の場合も下がっているというようなところも分かったので、また行橋市の子どもたちも、どうも英語に対して好きかどうかということに関しては、平均よりも大体低いという傾向がありますよね。その辺、ちょっと後半は実際に、私は英会話をやる機会というものを公立学校として、全ての子どもたちに、まず準備してあげるべきじゃないかと思っていたんです、一つの課程として。そうすることで英語に関心を持つし英語の素地が出来上がる一助になるのではないかなと思っていたんですが、ちょっとどうなのかなと思っていたんですよね。

そこで後半はもうちょっと掘り下げていって、きょうで決定できることはないと思っていますし、総合教育会議が必ずしも何かを決定する機関ではないんですけれども、もう少し、じゃあどういったことを我々ができるのかというのを、ちょっと多角的に見て御意見をいただけたらなと思います。

一旦休憩に入りまして、2時5分から再開させていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

休憩 13時57分

再開 14時05分

○市長 工藤政宏君

では、再開させていただきたいと思います。

いま休憩中もやっぱりいろいろな御意見が出てきまして、これちょっといろんな切り口、いろんな方向に話が展開できるので、僕もいま探りながらというか、考えながらなんですけれども、いま休み時間の話も含めて伺っていて、私の印象なんですけど、やっぱり英会話は、できるに越したことはない、できたほうがいい、というふうに考えているのは、たぶん皆さん共通しているのかなと思います。

それから、これは日本の英語教育のことなんでしょうけれども、もちろんグラマーとかもですね、そういった文法やライティングとかも、もちろん大切なんですけども、話すということに関していうと、あんまり小さいところに、発音などに拘り過ぎずに、まずは臆することなく相手とコミュニケーションをとろうとする姿勢だったりとか、そういったところがすごく重要なのかなと。

先ほど芸能人の出川さんの話も出てきましたし、その話は、実はきのう教育長たちと話したときも、まさに職員さんから出川イングリッシュという話が出たんですよ。後は千原せいじさんという芸能人の方がいますけども、あの方も海外どこに行っても現地の方と友達になったり、アフリカのどこかの国に行ったときには、1時間後には現地の人を引き連れて歩いていた、という話も聞いたことがあるんですが、コミュニケーション力、まさに人間力というか、そこには個性もありますので、皆が皆、中々そんなふうになれるのかなというところはあるんですが、ただちょっと細かいところに拘り過ぎてい

るところが、日本人が英会話を苦手としている部分があるのかもしれないですね。

小学校低学年というのは、まずは異文化に触れる。どういうふうになっているんですか。

○教育長 山田英俊君

そうですね。異文化にまずは触れるというのは、外国の文化に触れて違いが分かるということですよね。

○市長 工藤政宏君

具体的には、いま年間8時間の授業の中で、どういったことをされているんですか。指導室長、大まかでいいんですが、分かりますか。

○指導室長 古城敬三君

大まかに、挨拶の言葉だったり、果物などの絵を見て、これ何と言うかとか、数を言ったり、単語とか挨拶とかですね。

○教育総務課長 吉本康一君

勉強というよりは、日常の生活に即した、低学年は特に遊び感覚の要素が強いと思います。

○市長 工藤政宏君

これは指導されるのは、どなたがされるんですか。

○教育総務課長 吉本康一君

1年生はALTが、3年生以上になったら担任が一応指導して、そこに補助的にALTも関わっています。

○市長 工藤政宏君

これは、テキストというのがあるって、それに沿ってどこの学校でも同じものを教えていくということですか。

○指導室長 古城敬三君

5、6年生は外国語教科書ですので、当然教科書があります。3、4年生は、外国語活動なので、いわゆる教科書ではないんですが、副教材というのが文科省から配られていますので、冊子として共通のものがあります。1、2年は特にその時間というのではなくて、「その他の時間」でしていますので、特に教材とかテキストはないです。

○市長 工藤政宏君

その辺は、どこで決めるんですか。内容とかというのは現場の担任の先生と話し合っ、て、ALTと話し合っ、て決めたりしているんですか。

○指導室長 古城敬三君

1年生については、ALTのほうで作っています。

○市長 工藤政宏君

一つ、先ほど英語の問題、やっぱり低学年のときに、まずはそういうものに触れてもらうというのが重要、導入としてはすごく大切だと思うんですね。そこで英語に関心を持ってもらったり楽しいと思ってもらうことも、とても大切だと思うので。

じゃあ、まずそのとっかかりの部分で、そういったのをちゃんと提供できているのかどうかというのは、要は例えばアンケートをとったら、滅茶苦茶楽しかった、みたいな回答が返ってくるのか、それとも何をやってたのか結局分からなくて、しかも年間8時間ということは、本当に微々たる時間じゃないですか。その中で、要はアリバイづくりになっていないだろうか、ただ単に。

これ、別に行橋市の学校現場や教育委員会が悪いというのではなくて、実際に子どもに身に付くようになってきているのか、興味・関心を本当に喚起する機会になっているのかというところ、その部分ではどうなのかなという。あと僕が気になるのは、ALTの方の指導力、今の感じでいくと、ALTの方によって全然指導方法や指導内容も違う可能性がある。その場合に、すごく技術が高かったり、もしかしたら非常に子どもたちとコミュニケーションをとることが上手な方に当たれば、めっちゃ楽しかった、となるかもしれないけれど、そうじゃなかった場合には逆の方向にいっちゃう可能性もある。

その辺は、いま教育委員会としては、何かそこに問題意識というのがあるのか、あるいは、実はそこって課題の一つだと認識されるのか、それとも大丈夫だと思われるのか、どうなんでしょうか。

○教育長 山田英俊君

いま市長が言われたように8時間という時間の中でできることは限られていますよね。本当に英語に触れるくらいしかできないし、中学3年生までで英語教育をしっかりとやっていくとなったときには、1、2年生の時間も若干その時間を増やすという計画があって、指導の内容もしっかり、やっぱりどこの学校でも受けられるというか、そういう内容に固める必要があると思うんですね。どこも同じことをやっている。指導者が替わってもある程度のところは変わらないみたいなことは、研修の中ではつくっていく必要はあるかなと思います。

ALTが、やっぱり個人個人でスキルが違うところがあってですね、そこはやっぱり同じようにもっていく必要があるかなと思います。なので、それについては今後の課題かなと思います。

適切に何時間かというのは、まだ、カリキュラムの中でどれくらい入れ込めるかというのもあるのでですね。

○市長 工藤政宏君

いま大きく言うと、一つは8時間という時間そのものがどうなのかという問題ですね。もう一つは、今の段階では、ALTの内容しても指導力にしても、やっぱりALTに

依存しているところが大きい、ここをもうちょっと改善する必要があるのではないかと
いう、大きくこの2つの御意見だったと思いますが、どうですか。このあたりで御意見
がある方がいらっしゃったら。

桃坂委員、お願いします。

○委員 桃坂克己君

いいですか。今はネット環境が整ってきているので、小学校をつないで同じものを使
いながらALTが補助していくというやり方もできるんじゃないかと思えます。1、2
年生だったら興味のあるものをもっと全面的に、例えば海外のディズニーランドとか、
そういうところの画像を出して会話をするとか、何かいろいろとそんなことをやれば、
行ってみたいな、というふうになるんじゃないかなと思えます。

○市長 工藤政宏君

ありがとうございます。

吉兼さん、どうですか。

○委員 吉兼法子君

1年生、2年生の英語というのは、子どもが小学校に入って初めて出会う英語の時間
なので、とっても大事だと思います。この8時間で、英語って楽しいと思わせるのか、
あつ、退屈だな、難しいな、面白くないな、と思わせてしまうのとでは、後々雲泥の差
が出てくると思いますので、この8時間の内容、方法がとっても大事だと思います。

ですから、私はこの授業は見ていないんですけども、私の経験からいって、いま桃
坂委員が言ったように海外のイベント、お祭り、今の時期だったらハロウィンとかクリ
スマスとか、そういう低学年の子どもが親しみやすいような外国の、アメリカのそうい
うお祭りを紹介しながら、由来とか、一緒に楽しんでいくのもいいと思えますけれども、
とにかく英語って楽しい、英語の勉強って面白そうと思わせる8時間にしないと、意味
がないなと思っています。

○市長 工藤政宏君

ありがとうございます。

尾崎委員、どうですか。

○委員 尾崎環君

私は、もし現場にいるとしたら、低学年の毎日の帯の時間10分間を大事にしたいし、
10分間を何かそういう活動に親しませて、後ポイント的なところで吉兼委員が言われ
たように行事とか、それから桃坂委員さんが言われた、今このインターネットが普及し
ている時代で、東進の林先生じゃないですけど、林先生が東進で授業をされていたとき
は、すごく楽しい授業というか、評判が良かったんですよね。そういう授業って、どん
な授業なんだろうかと、こっちは見たいですけども、お金を出してまでは見に行きま

せんけれど、やはり配信してもらおうことで、あっ、こういうふうに授業をしたらいいなというヒントになると思うし、それが今できる時代だと思うんです。

だからとっても上手な先生のほうで、ばあっと言っておいて、後の時間をフォローしていくとか、担任の先生方と子どもたちが、こんなふうに言っていたから、じゃあこれをやってみようか、みたいなかたちで実際にやってみるという、そういう授業スタイルもあっていいなと思っています。

○市長 工藤政宏君

今の話をちょっとまとめて、例えばネット環境を使って、今の尾崎委員の話で言うと、オンラインでの、例えばすごくユーモアセンスもあったりとか指導力のある方とオンラインでやったりして、そこで学んだことを、また実際に教室で学んだりとか、それから後はディズニーランドとか海外のイベントという話がありましたけれども、例えばエンターテインメントの力だったりとか、そういうのをもっと活用して、子どもたちが本当に楽しいというような感覚をやっぱり持ってもらうということですかね。

あと尾崎さんがおっしゃったのは、毎日10分間、要は帯の時間を、例えば限られた短い時間でも毎日必ず英語の歌を、今月はこれです、とかを流したりとか。

というのは、YouTubeで、後で話そうと思いましたが、多言語話者の日本人とかいるんですね。例えば10数カ国後を話す日本人とか、それから独学で英語を身に付けました、みたいな、そういう方なんかは、四六時中とにかく英語のシャワーを浴びなきゃいけないということで、ただ映画とか誰かが話しているのをスピーカー付き眼鏡みたいなのがあったりするんですね、骨伝導で聞こえるような。それをずっと付けていて、四六時中英語を聞いていたらしいんですね。結構毎日英語に触れるという環境をつくるのが大切なのかなと、お話を聞いていて思いました。

鬼頭さん、いかがですか。

○委員 鬼頭良典君

それこそオンラインでリアルに外国とつないで、別に会話するとかじゃなくて、例えば小学校1年生にクローズアップすると、時差すら知らないじゃないですか。こっちは昼だけど向こうは夜とか。その辺のある意味の文化とか地球の仕組みとか、そういう紹介、そういう学びというところは、ちょっとリアルに外国にオンラインでつないでみるとかいうのも一つあっていいんじゃないのかなと思います。それは別に、さっき言ったマンツーマンとかではなくて、それは1対30とかでも、オンラインでつないでプロジェクターを出して、今はアメリカ、夜何時です、みたいな、それでも興味がわくんじゃないかなと思ったりしています。

後よく言われるのは、言葉とかはよく分からないけど、同じ作業をすると、つながりやすい。例えば、ある人が英語を使って一緒に料理をやろうということをやっている人

がいらっしゃるんですけど、低学年だと、そうはならないと思うので、例えば一緒に折り紙を折るとか、オンラインでもいいと思うので同じことをやるというのは、すごく言葉が通じなくても心は通じるかなと思います。

○市長 工藤政宏君

ありがとうございます。

○教育長 山田英俊君

通常たぶん低学年は、英語に親しむとなると、歌を歌ったり踊ったり、そこで英語を覚えるというのが多いかなと思うんですね。それをたぶん繰り返しているんじゃないかなと思うんですね。そういうかたちで、じゃあ目指すのはどこかですよ。楽しむだけでいいのか。あるいは少し歌を歌うことで単語を覚えていったらいいのか、そこら辺が6年間を通してどうするのかというところがあるので、ちょっと3、4年の英語のところの外国語につないでいけるような内容にしないといけないですよ。

そこはやっぱり教員も入ってカリキュラムを組んでいかないと、何か付け足しみたいなかたちになってしまうと、かえって統一性がなくなったりしますので。

○市長 工藤政宏君

一つ、きょうですね、英会話 公立学校、とか、英語力 公立学校、で調べたりしたら、さいたま市とかが結構英語に力を入れたりしているんですかね。前の教育長さんが力を入れていて、さいたまメソッドと言われているらしいんですけども、ただ、分かりません。本当にそこまで何も私も見たりしていませんので、ただ、同じような、たぶんいま皆さん方がお話をくださったような問題意識を、日本全国の公立小中学校や高校も含めて、もっていると思うんです。

だから、たぶん逆にそこに問題意識をもって先進的な取組をされているところも、他にもあると思うんですよ。私はそういうところをもっと何か本格的に調べてみる必要があるのではないかと思います。

私も恥ずかしながら、最初は飯塚市さんのみしか考えていなかったもので、ちょっともっと根本から考えていく必要があるなど。目の前の子どもたち、子どもたちって本当に成長が早いので、今すぐに準備できるものは今すぐに準備しなければいけないんですけども、もっと中長期スパンで、これは考えないといけないものかなと思いました。

それで、いま小学校1年生がメインだったんですけど、何となく小学校低学年、1、2、3、4年生にも、何となく共通して言えるようなことというのが、ある程度出ているのかなと思うんですけども、どうしても3、4年生で、これは絶対にやっておかないといけないものって、何かありますか。

主に小学校低学年、1、2年生という話が出ていましたけれども、最初に私が1、2年生という話をしたので、3、4年生でこれは抑えてほしいというのがあったら、いま

言ってほしいと思います。

○委員 桃坂克己君

3、4年生とは違うんですけど、中学校、高校、大学と行って、今の企業の状況というのを話をすると、一般的かどうか分からないんですが、うちもグローバルに展開していて、9カ国、17拠点、工場があります。人事制度のところで昇格基準にTOEICの点数が入ってきます。たぶん企業さんによっては点数が違うと思うし、TOEICじゃないところもありますけれども、そういった企業がどんどん増えてくることを考えると、やはり英語・英会話というところに触れていかなければいけない。

本当に海外との垣根がない時代になってきているので、企業としてはコミュニケーションをとれるということが必須になってくる世の中なのかなど。そのために、うちも今、飯塚市さんがやっていたオンラインの教育、これもそういった幹部候補生には必須でやらせるようにしています。

○市長 工藤政宏君

なるほど、そうなんですね。

○委員 鬼頭良典君

公用語が英語という企業もありますよね。

○委員 桃坂克己君

そうですね。うちは中国がかなり多いので、そこはあまり関係ないんでしょうけど、イギリスそれからアメリカ、フィリピンはないのですが、その辺に人の採用とかに行くこともあるので、そういった所も含めてですね。

○委員 鬼頭良典君

この前テレビでは、楽天はもう社内で英語しか使っちゃいけないということでしたね。
(「そうですね」の声あり)

○市長 工藤政宏君

他にどうでしょうか。

○委員 吉兼法子君

先ほど市長が言われた3、4年生でどこまでを目指すか、5、6年生でどこまでをと、これですね学習指導要領がありますよね。1、2年生の英語はないんですけども、3、4年生からは、外国語活動、5、6年生は外国語科としてそれぞれ目標があるので、それに照らしていま行橋市の子どもたちがどこまで達していて、何が足りないのかというところの分析をして指導に当たらなければならないと思っています。

○市長 工藤政宏君

そうですね。そこを委員、どう思われますか。そこは公立学校である以上、公立学校でなくても押さえなきゃいけないじゃないですか。それで本当に大丈夫かというところ

ですかね。

○委員 吉兼法子君

いえ、だから中身ですよ。そこだと思います。

○教育長 山田英俊君

そこはそこでもう変えられないところが実はあるんですね。でも英語の授業は、1対40では英語の授業はできないというのが実際にあって、やっぱり30人の子どもがおれば、30人の子どもが皆、なにがしかのALTと会話をするという機会をどうつくるかということが一つあると思うんですね。その会話のやり方によっては、子どもが、会話ができた、英語ができる、嬉しいと思って、また勉強するということにもつながるんですね。でも、これが1対30の場合だと、もう分からないままに1時間、喋らないまま過ごす子もやはりいるんですね。そこのところをたぶん補おうとしているのが飯塚市なんですけれども、でも飯塚市の方法だと、市長がおっしゃったように、何か機械的に喋っている感じもするんですね。相手はネイティブなんだけれども、そこを言うだけだから何となくもったいない感じが、私の中でもしています。

そこが、柔軟性なんですよ。こういう会話をしましょう、と言ったら、セブ島とそういう会話をやっているんですね。英語って、やっぱりその場で少し変わるというのが大事なかなと思います。そうなれば、ALTの数を1クラスに5人くらい入れて、先生と一緒に4人くらいのグループをつかって英会話をさせるというのも、あってもいいかなと思うんですね。そうしたら、そこでしか出ないライブな会話が出てくると思うんですよ。それが大事なかなと思います。そういうのがあったほうが子どもも喜ぶ気がします。

○市長 工藤政宏君

今ちょっと小学生のことを聞きましたけれども、どちらかというところ、小学生だったら興味・関心を持ってもらうというところがメインなのかなと思ったんですけれども、中学生になってくると、それこそ受験が目の前に迫ってきて、またやっぱり英語学習と英会話というものに対しての捉え方が、また小学生、今までの通常のかたちですのと違うのかなと思うんですけれども、もし仮に小学校のころに興味・関心を持ってきて、英語を発するというところに余り抵抗なくできるような、そういう能力が子どもたちに育っていけば、また中学校での教える内容というのが、当然変わってくるのかなと思うんですね。

ちょっとここまで整理すると、一つは、小学校低学年に関しては、まず時間について、特に1、2年生の時間については、これ一応、国では8時間ということですよ。

○教育長 山田英俊君

いえ、それは決まっています。

○委員 吉兼法子君

何も決まっていないです。

○教育長 山田英俊君

そこは増やそうと思えば増やすし、やっていない市町村もあるということです。

○市長 工藤政宏君

なるほど。逆に実際に他の授業があるから、時間を増やすというのは、なかなか厳しいということでしょうけれども、70時間を満たしていれば、5、6年生でも理屈上は増やすことも可能なわけですか。

○教育長 山田英俊君

そうですね。

○委員 吉兼法子君

増やす分はいいんですよ。

○市長 工藤政宏君

低学年の1、2年生の8時間という時間が本当に適切かどうかというのは、例えば共通のプログラムとかを考えていたり、後は教員のスキルアップとかALTの方たちのスキルアップだとか、そういうところと時間も一緒に考えていかないといけないものですかね。

○教育長 山田英俊君

そうですね。

○市長 工藤政宏君

本格的にやっついこうと思えば、そういう作業もやっぱり必要になってくるということですね。

○教育長 山田英俊君

そうですね。

○市長 工藤政宏君

中学生とかに関しては、いま目の前にいる中学生たちのことを考えたときに、行橋市では、いま海外と触れる機会とすると、一つはニューヨークへのホームステイ事業、でもこれは、ここ数年は10名くらいしか行くことができないという、かなり狭い門になってきています。参加費もそれなりにかかるというのも現実問題としてありますよね。

その他にされていることというと、公民館とかの、先ほどありましたけれども・・

○教育総務課長 吉本康一君

小学生は公民館を使ってです。

○市長 工藤政宏君

小学生は公民館ですね。中学生はKGGですね。このKGGに関しても夏休みに希望者のみ一応いま対応しているということですよ。

その他は、日ごろの学校の英語の授業以外ないということですね。

○教育総務課長 吉本康一君

そうですね、事業としてはそれ以外ないというのが現状ですけど、いわゆるKGGは本当にいい施設なので、さっき言った本当の実体験とはちょっと違いますけども、でも、それに近いものが格安で体験できる、立地的にも北九州という近い地域にできましたので、ああいうのをもっとアピールして、今年度は初回だったので、15名参加でしたけども、これをまたしばらく続けたいなと事務局では思っているんで、次年度また募集をしますけども、そこをもっと30人とか増えていければ、そういった体験ができる生徒が増えるのかなと。

ただ、やっぱり意欲的な子どもしか手挙げして参加してこないのが現状なので、でも魅力的な施設なんですよ、というのをアピールして行って、我々は周知していくのが務めなので、そこは教育委員会として周知して、当然中学校の英語科の先生の協力を仰ぎながら、こういった教育委員会の事業があるよ、夏休みだけでも参加ができるよというのを知ってもらえれば、もしかしたらまだ増える可能性はあるのかなと思います。

○市長 工藤政宏君

ここは、ちなみに滞在時間はどれくらいなんですか。

○教育総務課長 吉本康一君

選べますけども、今回は半日コースでしたが、午前・午後とかもありますし、例えばセットで事後研修をやってくれたりするプランもありますけど、当然費用は上がりますけども、そこは費用とも照らし合わせながら、こういったプランで募集を掛けるかというのは、選択の余地はあります。

○委員 鬼頭良典君

ここ、めっちゃ面白いですよ。

○市長 工藤政宏君

行かれたんですか。

○委員 鬼頭良典君

はい。子どもを連れて何回も行きました。面白いです。

○教育長 山田英俊君

私もここは行ったことはないんですが、この体験をすると、ニューヨークに行ったときに、まずは税関を通りますよね。それで中学生が通るときに、何のために来たのかと聞くんですよ。自分で答えなければならぬ。それが答えられなかったら引っ張って行かれるんですね。実は男の子が引っ張って行かれて、困ったことがあるんです。引率の職員が言うけどだめで、いや、本人の言葉で言わせてくれと。要は、サイトシーイングと言うだけでいいんですよ。いいんですけど言えなくて、その子は別に勉強ができな

いわけでもないんですね。だからこういう体験をすると、英語が本当に必要だという可能性があるので、意識づけには結構な効果があるかなと思います。

○委員 鬼頭良典君

確か入口がもう入管みたいな感じですよ。

○教育総務課長 吉本康一君

そうです。

○委員 鬼頭良典君

もう疑似体験です。入るときにいわゆるパスポートを受付で貰って、入管のゲートを通って行くみたいなイメージです。

○市長 工藤政宏君

小学校高学年から中学校になると、特に小学校低学年と比較すると、英語を学びたいというのは、きっかけがちょっと変わってくると思うんですよ。小学生から中学生になってくると。中学生とかになってくると、それがそれこそ必要性だったり、後は好きなアーティストが英語の歌を歌う人だったら、それをもっと知りたいとか、そういう中学生に引っかかるようなきっかけづくりというのが重要なのかなと思いますね。

○教育長 山田英俊君

そうですね。英語が喋れるようになったらいいなと、この体験で思うと思うんですね。

○市長 工藤政宏君

ただ、これが今の段階では、興味ある子たちが手を挙げてくるということですよ。

○教育長 山田英俊君

そうですね。

○教育総務課長 吉本康一君

プランによっては、北九州市はそうですが、社会見学は強制的ですので、3年生を全員連れて行くとか、小学生は行ってもいいんですよ。そのようなプランに、そこを導入してもらうとかいう方法もあるんですが。

○市長 工藤政宏君

ありですね、そういうのも。まずきっかけをつくるという意味では。

○教育長 山田英俊君

全学年ではないけれども一部補助とかをしてですね。

○市長 工藤政宏君

小学生は、ちなみに年齢制限とかは特段ないんですかね。

○教育総務課長 吉本康一君

小学生は、営業で受けたときには、社会見学で来る学校もありますよ、という話を聞いたことがあるので、今回うちは初めてだったので、まだ学校とのすり合わせもできて

いないところもあったし、なので中学生を対象にして、要は実践の場として、小学生から勉強してきて中学生になって、特に興味のある子で普段ALTと関わって喋ろうとする、チャレンジしようとしているけれども、それがもっと違う場面で、普段会ったことのないネイティブの方がそこの施設にいるから、じゃあどこまで自分の英語が通じるのか確認できるというか、そこでまた違う、普段関わらない外国の方にも通じたら嬉しいと思うと思うんですよね。それが相乗効果で、やっぱり楽しいよねと。

アンケートを事後に取りましたけれども、やっぱり楽しかったという声が多かったので、もう少しこれは続けてみてもいいのかなと思っていますけれども。

○市長 工藤政宏君

これ一つ何か選択肢として中1、小5・小6くらいでも全然よさそうですね。

○委員 鬼頭良典君

全中学校で導入してバスで行くとか、スペースワールド駅も近いのでJRで行くのもひとつかもしれないですね。

○市長 工藤政宏君

いのちの旅博物館とかは社会見学で行ったりしますよね。

○委員 鬼頭良典君

その隣ですね。アウトレットの中に、科学館が移転して、その横にあります。

○市長 工藤政宏君

一般で行くことも可能ですか、予約をしてですか。

○委員 鬼頭良典君

全然可能です。予約です。

○市長 工藤政宏君

なるほど。こういう施設とかも活用すべきですね。

○教育長 山田英俊君

一度に入れる人数は決まっているんですか。

○教育総務課長 吉本康一君

予約制なので、一学年全部は行けないかもしれませんが、ちゃんとプログラムを組めば、できなくはないのかなと思います。

○市長 工藤政宏君

以前、英語キャンプとかをやっていて、それがなくなって、今回こういうKGGとかに行く機会があるじゃないですか。英語キャンプなども対象は希望者ですね。そういった意味では、ひとつのきっかけをつくるという意味では、私もここに1回行ってみたいと思いますけれども、きっかけをつくるという意味では、すごくいいかもしれませんね。社会見学とかで皆に行ってもらうことも、ありかもしれないですね。

その他に皆さん方のほうから、本当にいろんな御意見をいただいているところですが、何か他にありましたら。

○教育長 山田英俊君

小学生でもう既に3、4年から英語、外国語、5、6年で英語ですよ。で、昔は中学校に入ったら、英語って、初めてなので、最初は皆100点くらいですよ。でも、もう小学校から英語だったら、もう既に差が出たかたちで中学校に行くんですよ。なので、そこら辺で1回英語の必要性を感じさせるというのは大変大事かなと思うんですよ。

いまKGGに中1になったときに、まずは行かせる。そうしたら英語の大切さが分かって、またそこからまたギアチェンジして英語を勉強するかもしれないということもあるかもしれない。いつ入れるかで、またその効果が変わるかもしれないと感じています。

○市長 工藤政宏君

あと思ったのは、例えば幼少期から英会話を習っているとか、結局皆さんスタートが違うので、既に、いやもう全然余裕というのも実はあると思うんですよ。これは現場でのあれなんですかね。でもそういう子たちが逆に教える側に回ってくれたりだとか、チームで何かそういう子たちを上手に生かせる。これは英語だけに限ったことではないですよ。対話型学習ですよ、要するに。

○教育長 山田英俊君

はい、それは大事だと思うんですよ、子ども同士で英会話をするというのも大事です。

○市長 工藤政宏君

いろいろと御意見もいただいていますので・・・

○委員 吉兼法子君

そういう活動的なことと言えば、例えば市主催の英語のスピーチコンテストみたいなものを開くと、またそこに向けてやる気が高まって・・・

○委員 桃坂克己君

みやこ町は弁論大会をしていますよね。

○委員 尾崎環君

それから英語劇とか、そういう何かポイントになるものがあればですね、刺激を受ける機会になると思います。

○教育長 山田英俊君

市長がきのう言われていた英語クラブが、もし中学校にできると、できてもたぶん目標がないんですよ。なので、英語スピーチコンテストをやりますよ、となると、中学校に英語部ができるかもしれないですよ。市長が言われるように英語に特化して勉強しようという子も出てくるかもしれないですよ。

○市長 工藤政宏君

スピーチコンテストとか英語劇とか、確かに目標となるものができたらいいですね。

○教育長 山田英俊君

ことしの伊良原中学校の生徒さんでしたが、本当に立派に英語スピーチをやっていましたね。

○委員 吉兼法子君

行橋市内でも特に中学生なんか、英語が上手な子どもって、きっといると思うんですよ。そういう子どもの出番を与えてあげると、またお互いの刺激になって、英語力がアップするんじゃないかなと思います。

○市長 工藤政宏君

あと私ができること、私たちが比較的そんなに時間もお金もかけずにできることといったら、日本人で、いま海外で活躍している、この地域出身の方、もちろん企業人の方もそうなんですけれども、いろんな方たちがいるんですよ。そういう方にフォーカスして、その方たちに実際に話してもらおうというのは、野本会長は話せないパターンでしたけれど、そういう野本会長が、やっておけば良かったというのも、すごく若者には説得力があったように思ったんですよ。

例えば、いまアベさんという女性が、アゼルバイジャン共和国の日本大使館で公邸料理人をされているんですね。この方も海外のいろんな所に行かれていますけれども、例えばそういう方がいますし、いろんな実際に英語を身に付けた方、またいま海外に住んでいる方の話をリアルに聞くとというのも、特に中学校以上になると興味を持って聞いてくるんじゃないかなと思いました。

ユーチューバーでも、さっき申し上げました多言語話者の方とかは、私も常々エンターテインメント性というのは非常に重要だと思っているので、やっぱり興味を持ってもらうという意味では、そういうエンターテインメントの世界で活躍している方とか、そういった方の力を借りるとというのは、ありなのかなと思います。

○委員 尾崎環君

その点、市長さんが全クラスにデジタル黒板を入れてくださって、とってもいいと思います。すごい活用幅というか、そういう方がお話されても全校に流すこともできますし、すごい画像が鮮明なので、すうっと入ってくるんですよ。今までのプロジェクターとは全然違って、見えやすいし、分かりやすいし、大きくもできますし。そういうイベントをされたとしても、やはり使い勝手がいいというか、もう本当に皆に配信できるし。

あのデジタル黒板は本当に利用価値が無限大にあるんじゃないかなと思いました。

○市長 工藤政宏君

なるほど、分かりました。ありがとうございます。

ちょっとこれはたぶん話せば、まだまだ広がると思いますが、きょうは多様な御意見をいただくことができました。何か私も、これをすればいいんじゃないかというのもあったりしたんですけども、でも、私自身も固定観念を持っていたような気がします。

英会話の、いわゆる飯塚方式を導入すれば、まずはいいんじゃないかとか、これ、飯塚方式が悪いとかではなくて、もっともっと奥深いなと思いました。

ちょっと、きょうをきっかけに、ぜひ教育委員会のほうでも、やるならば本当に子どもたちに本物の力を育てるといふ、それがやっぱりほとんどの自治体でできていないんだと思うので、そこを本気で英語に関してやっていけば、これはひとつの子どもたちにとっても財産になりますし、行橋市のひとつの子育て世代を中心に誘致してくるという意味でも強みになると思うんですね。ぜひいろんな課題があつて大変だと思いますけれども、教育委員会のほうでもまた前向きに検討していただきければと思いますので、よろしく願いいたします。

○教育長 山田英俊君

分かりました。

○市長 工藤政宏君

皆さん、他に何か御意見がなければ、きょうはここまでとしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

ありがとうございます。

それでは進行を事務局に戻させていただきたいと思います。

4. その他

○教育総務課課長補佐兼教育政策係長 加來義宏君

ありがとうございました。

本日の協議事項は以上でございますが、その他の点について、何かありませんでしょうか。

(特に声なし)

5. 閉会

○教育総務課課長補佐兼教育政策係長 加來義宏君

それでは、以上で令和6年度第1回総合教育会議を終了いたします。

今後の総合教育会議開催につきましては、また改めて日程等を事務局から御連絡させていただきます。

本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございました。

(「ありがとうございました」の声あり)

閉会 14時46分